



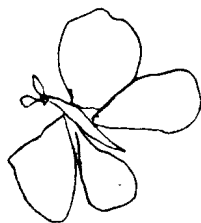
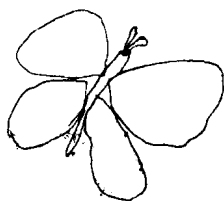
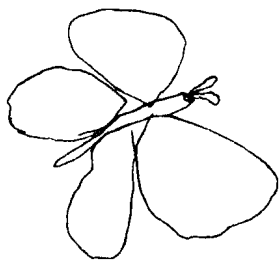
張さつき

リンデンバウム

菩提樹の花咲く国で

一主婦、ドイツに生き

未幸



善提樹の花咲く国で

一九八一年二月二〇日 第一刷発行  
一九八二年四月二〇日 第三刷発行

定価 一二〇〇円

©著者 張 さつき

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三十七二  
振替・東京七十八七三八五番

本文組版 ぶんじ活版

本文印刷 萩原印刷

装本印刷 形成社

製本 今泉誠文社

リンデンバウム  
菩提樹の花咲く国で

——主婦、ドイツに生きる

目次

|                      |   |
|----------------------|---|
| はじめに……………            | 七 |
| シュツットガルトでの一年間……………   | 二 |
| 二年目のストラスブルグでの生活…………… | 四 |
| カンシュタットの住いと生活……………   | 六 |
| ユキを幼稚園に入れる……………      | 九 |
| ドイツ語学校……………          | 七 |
| ドイツの住居について……………      | 六 |

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 就職先ますます悪化……………        | 八二  |
| ユキの入学と学校生活……………       | 七七  |
| ドイツの子どもたちとあとな……………    | 一〇九 |
| ドイツ人と共にくらしした二か月間…………… | 一二六 |
| 就職内定……………             | 一三三 |
| 帰国までの日々……………          | 一六六 |
| あわりに……………             | 一七五 |
| あとがき……………             | 一七七 |



リンデンバウム  
菩提樹の花咲く国で

——主婦、ドイツに生きる





## はじめに

一〇年ひと昔の一九七一年、夫は東京にある国立大学の付属研究所（理論物理学専攻）の助手として働いていた。その研究所には創立当時から内規があり、助手の任期は五年間と定められていた。若い研究者の五年ごとの入れかえは、就職先がたやすくみつかる時は人事交流を促すものとして歓迎されていたが、一九七〇年ころより、オーバードクターがちらほらと目立ち始め、任期制のある研究所ではその先の就職が、徐々に楽観をゆるさないものになり始めている。

夫もそのころ任期切れに近くなり、国内の他大学に職場を探し始めていた。そのような時、ドイツのシュツットガルト大学とフランスのストラスブルグ大学から、それぞれ一年間という仕事の話がもち込まれた。夫の周囲では、研究者として一人立ちする前に外国で研究生活をしてみるということがよく行われていたので、ここはひとつ国内での職探しは少し延ばして、まず外国へ出かけてみようということになった。

多くの不安があったけれど、初めての外国生活に対する期待の陰に押しやって私たちは出発した。夫と私三〇歳、長男二歳、長女八か月の一家そろってまさに生まれて始めての日本をあ

とにする旅立ちであった。共済組合よりの借金二八万円也。これは当時のお給料の約四倍、私たちが借金できる上限であった。

言葉の勉強は、夫は大学でドイツ語を第二外国語として修得していたが、フランス語の方はストラスブルグに行くことが決まっていたから、大いそぎで六か月間ほど日仏会館にならに行っていた。私は英語を義務教育と高校でならったばかりは、いっさい外国語に縁のない生活をしていて、そして私は、ドイツであれ、フランスであれ、人の心はみな同じ、人間はみな同じなのだから、言葉ができなくてもなんとかなると、若さだけをたよりに事を運んでいた。

飛行機がパリに到着した時、夫は四人分の制限重量八〇キロのスーツケース、肩からは一箇はドイツ人にたのまれたカメラ、もう一箇は自分のカメラをたすぎがけにぶらさげ、私はおしめとミルクの鞆、ものの一秒間も私の身体から離れない妙子をかかえ、これまた子どもでも目の下に真っ黒なくまができることを教えてくれた由紀夫にワンピースのすそをつかませ、疲れでコンタクトレンズがあつというまにくもってしまうのを、コリコリさせながらタクシー乗り場に直行した。

パリのタクシー乗り場は、いつもこういうものかしらないけれど、あの時は行列の人々が順番をまたず競争で車を取りあいしていた。人に迷惑をかける行為に対して即刻ひと言もふた言もある剣道三段の夫を、なにかいだろう、と見あげたらびっくりした。ポーツとつ立って見ているのか、見ていないのかわからないうつろな目で、後からくる人にタクシーをとられるのを放っているのである。この時始めて、これは大変なことが始まったのだという実感がどっ

と湧いてきたものだった。私もすっかりしなければいけない、とようやくにして自覚した。

就職の方は二年の滞在の間には、母国でしかるべき所がきつと見つかる、と安易に考えていた。しかし就職状況は悪化の方にかたむき、日本中オーバードクターがあふれだした。そしてこれは日本だけでなく、各国とも同じ状態におち入っていることを耳にし、目にし、私たちは狼狽した。そして結局五年の歳月を職を探しながらドイツとフランスに滞在することになってしまった。心配ごとがあったために見えなかったものがよりよく見え、人の優しさも倍くみとれた。傲慢な言葉には倍傷ついた。

けれどももっとも私にとってプラスになったことは、人間みな同じとする十把ひとからげの私の考え方が、危険な考え方であるのではないか、ということに気がついたことであつたと思ふ。こちらが傷ついたといっても、相手にそのつもりは毛頭なかったとしたら？ 私にはほめたつもりでも相手にとって、正反対のことであつたら？

シュツットガルトに着いてまもなく、私は八か月の娘を乳母車にのせて息子ともども公園によく出かけた。そこで出会う同じような赤ちゃんに、私は日本でそうしたようにいったものだった。「なんて色が白くかわいいのでしょう、プクプクとこんなに太って」と。自分では大いにほめたつもりでいったのに、全然反対のことをしてかしてたと後日知って驚いた。

色が白いことは、ママがたびたび外に連れ出して日光浴をさせないことから、ママの怠慢を意味し、プクプク太っていることは、ただただ欲しがるままにミルクを飲ませている、という大人の側の自制心のなさを意味するらしく、両方ともほめ言葉では全然ないのであつた。こん

なふうな出来事を通して、文化や価値観の違いを認め合うということが、人間同士どんなに大切なことか、私は徐々に理解することができたと思う。

海外に留学、就職そして旅行にと多くの方々の旅立っていかれる今日を思い、ごく普通のひとりの主婦が悪戦苦闘しながら、ごくあたり前に過ごした日々がどんなものであったか、知ってもらえたら私は本当に嬉しいと思う。

私たちの長い間の懸案であった就職は、一九七七年一月関西の大学に決まるということで落着いた。以下はそれまでのごく身近な日常を通しての私たちの生活記録である。

## シュツットガルトでの一年間

## 初めての友人・ハイジ

シュツットガルトに着いたのは、一九七一（昭和四六）年八月二五日だったから、それはまさにヨーロッパの秋の始まるころであった。

私のしなければならぬ仕事のまず最初は、なんとしても二人のチビを公園につれていってやること、スベリ台や砂場を探すことだった。運よく家から歩いて一〇分ぐらいの所に大きな古い公共のお墓があり、その鬱蒼と繁った木々の突き当たりにきれいな公園があった。ホッペンラウ遊園地といった。

そこに通い始めて二か月ほどたったある日、髪の毛の長い色の白い、それでいてどこかドイツ人といっぶう趣きの変わった優しいまなざしの女の人がいることに気がついた。一度チラッと見た時、優しそうな人だなあといい、二度目に会った時ニコツと笑いかけてみた。彼女の方も頬笑んで、これが私の子なのというように、二人の子どもを抱き上げて見せてくれた。

その時はもう一〇月で、あたりはカスタニア（ドイッの栗）の大きな黄色い葉っぱで一杯だった。彼女は黒のすその長いコートを着て、二人の子どもは二人乗りの大きな乳母車に乗り、

ふわふわした赤い毛布でくるまっていた。秋が深まるにつれ寒くなってきた、きっともうこの遊園地にもこれなくなるだろう、そして多分本で知っている長い冬がくるのだろう。そしてこの二人のチビにどうやって友だちを見つけてやったらよいのだろう、と私の思いはそればかりであった。その時に出会ったのが彼女だった。

とうとう決心して夫に、小さな紙切れにドイツ語で「お友だちになりたいのですが、よかつたら遊びにいらして下さいませんか」と書いてもらった。

次の出会いの時、私は勇気を出して、この紙きれを手渡した。

髪の毛の長い彼女はニコニコ笑いかけ握手を求めてきて、「私の住所なのです」と本屋さんの領収書の裏にアドレスと電話番号を書いて渡してくれた。これだけで私は大仕事をなすとげたように疲れはて、それでもその日は大満足して帰ってきたものだった。

それからほんの二、三日たった後、彼女がわが家の玄関に立っていた。「砂場にユキオと書いたお砂場の道具がころげていたので拾ってきたのです」といって、小さなバラの一枝と一緒にわたしてくれるのだった。

すぐ家に入ってもらって、初めて彼女の名前を知ったのだった。ハイジ・バーダー、かわいいチビさんは上をクリスティーナといい二歳、下がエレン八か月だった。

ユキが二歳、タエ一〇か月の時だった。

彼女の名前がハイジであることに、私はたまらなく嬉しかった。アルプスの少女ハイジならぬ、シュツツトガルトのハイジである。ドイツ語は何もわからないので、ゆっくりゆっくりの

英語で話してもらった。なぜだかわからないのに、私の胸にまったく確信に近い何ものかがあって、この時からハイジは私の友人、素晴らしい友人になってくれるに違いないと嬉しくてたまらなかった。

次の時、また公園で会った時、何も話らしい話もできないのに、ハイジも私も昔からの知合いのように挨拶しあったものだった。カスターニアの葉を彼女がいく枚も拾い、それで冠を作り、四人のチビたちの頭にのせてくれた。「昔から伝わる秋の遊びなのよ」といいながら。彼女はまったく優しい人で、自分の子と私の子とそれから周りの子みんなに、心から優しく一杯の声で話しかけてくれる。ユキとタエが、ドイツ人からまったく普通にドイツ語で優しく語りかけられ、これはママと違う言葉なのだと意識したであろう最初の語り手が、ハイジだったのが、私にはとても嬉しかった。

こうしてハイジは私たち夫婦のよき友人となり、子どもたちの素晴らしいハイジおばさんになり、まもなく私たちは彼女のご主人、グラフィックデザイナーのベルントとも仲よくなり、五年の歳月をまったく共にしたといっても過言でない間柄になっていた。

出だしがこうして優しい友人にめぐり会えたこと、これは素晴らしいことだった。しかし最初の年は、なんといってもすさまじい日々であった。

不安と屈辱  
感と喜びと

だいたい私の生活状態は、夫を送り出してから、まったく日本と変わりのない午前中の掃除洗濯。変わっている点は二つ。一つは広い家。日本を出てきた



時のアパートは二八平方メートルだったけれど、ここは八〇平方メートル、この広さは私たちにとって素晴らしいものだった。ありがたくて私は一生懸命に掃除に精を出した。

この家は私たちの前には、やはり同じ研究室で仕事をしていた日本人の方が住んでいて、たくさん嬉しい置き土産があった。このことは私のオドオドした精神状態に、大変な効果があり、助かった。また、ドイツに来たのだから観念しなさい、ドイツ人のお掃除好きは薄気味悪くて、気が変になるけれど、ドイツに来たのだ、掃除学を学びに来たのだ、と気持ちを变えなさいね、と日本から先に来ていた先輩の方が、教えてくれた。

もう一つ変わっていたことは、洗濯機のないことで、せつせと二人のチビのおむつの洗濯で、私の腕は日々たくましくなっていた。

家具つきの家を月々七万円近くで借りたのだけれど、なぜか洗濯機はついていなくて、立派な家具類に比して旧式な掃除機を見ても、電器製品ははるかに日本が進んでいる、ということらしかった。

午後は、天気さえよければ公園と砂場通い、子どもがあきるまで、ハイジと出会ったあの公園で、私は坐っていた。ハイジがいなくて、親切なドイツ人にはいくらも出会い、心なごむことの多い私の社交の場ではあったけれど、ひとたび何かが狂うと、私の心の平衡はすぐにもくずれ落ちてしまえう。

公園ではいつも多くの人の視線を、いやというほど感じる。一年や二年では、この人々の視線というものに鈍感になり切れない。つい気の弱い私は、子どもにもいい子であることを要求